

を兼ねることが認められていなかったことから、カトリックの外国人神父が日本人のクリスチャン医師や看護師と協力して、医療宣教が進められることが多かったと回答した。次に、千葉県館山市でコルバン夫人が活動していたが、夫のコルバンの北海道での医療事業について質問をいただいた。それに対する応答として、拙著がアメリカ人医療宣教師を主たる対象としており、コルバンを含むイギリス人医療宣教師について十分に取上げていなかったことから、彼の活動について、私自身まだ知らないことが多いと回答した。最後に、山崎佐氏がかつて、日本の医学史研究においては宗教の部分が欠落しているという指摘をしており、西洋世界では近代医学とキリスト教が密接につながっているのに対し、日本ではそういった

つながりが薄いと考えられているが、その点についてどう考えているかという質問をいただいた。それに対しては、拙著で論じたように、キリスト教精神に基づいて活動してきた日本人医師は多くいたことを説明しつつも、拙著の主たる対象がアメリカ人医療宣教師であったために、日本人クリスチャン医師の活動やその思想については十分に分析できなかったと回答した。そのため、今後は、実際にこれまでにクリスチャンとして活動してきた医師（そして、日本医史学会にもそのような方は多くいらっしゃると思う）に実際に話をお伺いしていくことで、日本人にとっての医学とキリスト教の関係について考えていきたいと思う。

(令和4年6月例会)

『洋学史研究事典』と医史学研究

青木 歳幸

このたびは、伝統ある矢数医史学賞を『洋学史研究事典』にいただき、編集委員一同大変喜んでおります。ありがとうございます。

なぜ洋学史研究事典の編集にいたった経緯や目的は、受賞記念の挨拶で紹介しましたので、ここでは『洋学史研究事典』が、医史学研究にどのように活用していただけるかという点に絞ってお話させていただきます。

本書で洋学史とは、日本列島の人々は、在来の技術や大陸から得ていた知識を土台に、16世紀以降の西洋の人やモノ、書物から積極的に多くを取り入れ、発展・昇華させ、地域社会でさまざまな達成をもたらしており、その営みの総体を洋学史と定義し、研究編と地域篇の両面から、その研究史を整理・叙述しました。

研究編では、第I章洋学の社会的基盤で、オランダ東インド会社（松方冬子）、商館長江戸参府（松井洋子）、オランダ通詞（イサベル・田中・ファンダーレン）、医療宣教（藤本大士）、幕末のコレラ（海原亮）、漢学・漢方医学（町泉寿郎）な

ど、第II章支えた人々で、カスパル・シャムベルゲル（ヴォルフガング・ミヒェル）、沢野忠庵（平岡隆二）、シーボルト（沓澤宜賢）、モーニッケ、ポンペ、ボードイン（相川忠臣）など、第III章影響を与えたモノでは、植物（平野恵）、動物（小佐々学）、医療道具、医科器械（ヴォルフガング・ミヒェル）、人体模型（青木歳幸）など、第IV章普及した書物では、ガランマチカ（鳥井裕美子）、シーボルトNIPPON（宮崎克則）、ドドネウス「草木誌」（フレデリック・クレインス）、ヨンストン「動物図譜」（勝盛典子）、厚生新編（上野晶子）、マートシカッペイ（吉田忠）、解体新書（石田純郎）、イペイ（八耳俊文）など、第V章. 研究教育の場では、蘭学塾（海原亮）、薬品会（伊藤真実子）、薬園（平野恵）、蕃書調所・開成所（八耳俊文）、長崎遊学（平岡隆二）、長崎海軍伝習所（神谷大介）、ユトレヒト陸軍軍医学校（石田純郎）、幕末のオランダ留学（大久保健晴）など、第VI章近世学芸から近代学術へでは、外科（坂井建雄）、小児科（青木歳幸）、種痘（青木歳幸）、養生・公

衆衛生(瀧澤利行)、薬学(米田政典)など、多くの医史学関連項目を挙げました。

地域篇では各都道府県別に洋学史研究の現状をまとめ、そこに各県域での医史学研究を絡めて叙述してみました。具体的な内容は、本書を読んでもいただければと思います。

『洋学史事典』以後の本書での新たな研究状況を、種痘を例にまとめてみます。『洋学史事典』においては、種痘、天然痘の項目はなく、『種痘必順弁』(339頁、深瀬泰旦執筆)、伊東玄朴(59頁、鍵山榮執筆)、楢林宗建(531頁、中西啓執筆)のほか、モーニッケ(706頁、長門谷洋治執筆)では、「佐賀藩主・鍋島閑叟は藩医楢林宗建を通じ商館長に痘苗の取り寄せを依頼。モーニッケはこれに応じて持参したが善感せず、痘漿でなく痘痂がよいのではないかとし、それがバタビアより着いたのが四九年七月で、宗建子息の上腕の接種に成功し、これより京都・福井にまで種痘が伝わるに至った」とあります。

じつは、種痘伝来時期は、嘉永2年(1849)6月から7月か研究者の間でも、近年まで定まっていなかった。それを、アン・ジャネット『種痘伝来』(英語版2007、廣川和花・木曾明子翻訳2013)で、モーニッケの書翰や商館長ヨゼフ・ヘンレイ・レフィスゾーンの『オランダ商館日記』から、痘苗の到着が、西暦1849年8月11日(和暦6月23日)で、楢林宗建子らへの接種が8月14日(和暦6月26日)と初めて確定しました。そのことは、青木が柴田方庵日記など日本側史料で検証しました。

しかしながら、アン・ジャネット著でも、日本国内への伝播については、『洋学史事典』や、『天然痘ゼロへの道』(内藤記念くすり博物館、1983)に依拠したままだったので、誤りもあり、各地の地域史研究の成果が十分伝わっていませんでした。

こうした問題点をふまえ、『洋学史研究事典』では、各地域の種痘伝播と役割や特徴についても極力調査し掲載しました。平行して、青木歳幸を代表とする科研費チームが『天然痘との闘い』(岩田書院)シリーズで、全国調査をすすめました。

近代医学は、西洋医学を土台にしています。西洋医学がどのようにわが国に導入され、漢方医学や和方医学らと混交・反発し、医学の正統となっていたのか、地域においてどのような医学教育が行われ、独自に展開していったのか、その歴史をさぐることは、これからの医史学研究に大きな意義を有するのではないのでしょうか。

山崎佐氏が『日本教育史資料』などから『各藩医学教育の展望』(国土社、1955)を発表してから70年近くたちます。坂井建雄編『医学教育の歴史』(法政大学出版局、2019)が古今と東西の視点から、内外各地の医学教育をまとめ、口火を開きました。

『洋学史研究事典』の地域篇での手法と『明治前医学史』の手法とを用いて、学際的に、藩だけでなく私塾を含めた医学教育の全国的な医史学研究が求められている時期ではないのでしょうか。

(令和4年6月例会)

書 評

服部 瑛 著

『古文書から見た幕末のコレラ——コロナ禍に遭遇して——』

本書について、「幕末安政時代のコレラの流行の実際について古文書を通して点検、体験していただく試み」を通して、「コロナウイルスが跋扈している今ならば当時の状況を正しく理解していた

だけのではないかと」筆者がまえがきで執筆の目的を述べている。本書は現在のコロナ禍にも通じる過去のパンデミックがあり、それを知ることができる郷土資料が残されていることを私たちに